

〈研究ノート〉

ガリシアにおける聖地巡礼の伝承歌

Cántigas populares nas romaxes en Galicia

浅 香 武 和

はじめに

聖地巡礼はガリシア語で Romaría または Romaxe である。かなり前になるが、ノーベル文学賞作家のカミーロ・ホセ・セラのスペイン語の小品に「ロメリア」があることに気づき、一気に読んだ。村の聖人を祀るお祭りに、人々が詣でる話だ。ロマリーアの語源は、聖地ローマに向かうことから発し、キリスト教世界では3世紀頃から殉教者の墓参に行くことが始まりのようだ。その場所を聖地 Terra Santa と定めている。ガリシアでは3,799 教区があり、各地区には聖人が祀られている。とくに良く知られている47の聖地がある。小稿は、筆者が聖地詣でをしたことがある四ヶ所を取り上げて、私の聖地巡礼を行いたい。

I フランケイラの聖地巡礼

As Romaxes da Franqueira

フランケイラは、ポンテベドラ県カニィーサにある。近在の村の人々は、それぞれの村の聖母マリアを担いで巡行を年二回行う。フランケイラの聖母マリアは、ガリシアでも最も古く、その信仰はガラエキアのキリスト教化された六世紀に遡る。言い伝えによると、フランケイラとルネダ教区の間にある 924 メートルのラダント山の頂にあるコト・ダ・ベージャ岩の下に聖母が現れた。伝説はさらに続けて、一人の女性がフランケイラ辺りを歩いていると小川の近くの岩の間に光明を目撃した。その奇跡から聖母のイメージが考えられた。おそらく、ケルトの水の女神かキリスト教以前の時代の巡礼に現れる自然神を崇拝する萌芽からキリスト教化したものであろうとされている。

地名の Franqueira はゲルマン語に起源をもち、「自由な人間の場所」の意味がある。聖母像はイスラム教徒とノルマン民族の侵略から略奪を回避するためにガリシア王国時代は隠されていた。

1063 年に修道院の存在が確認されると、ガリシア王フェルナンド一世は、院長のアルビテと修道士に寄進を行った。現存する修道院は、1343 年にクララバルの修道士たちによりゴシック・ロマネスク様式の玄関が建立された。1520 年頃に修道院は衰退し、ソプロソの領主レオン十世ドン・ガルシア・サルメントにより縮小された。19 世紀に教会の財産永久保有権略奪の後、シトー派の修道院は若干の改築の後、現在はトゥイ司教区にある。

パスクイージャス Pascuillas (または pascuela) と呼ばれる祭礼は、年に二度ある。最初は、復活祭の 51 日後の月曜日に開催される。カニィーサと近隣の村の教区から行列があでやかな聖母または聖人とともにフランケイラの修道院に詣でる。フランケイラの聖母に到着の挨拶をして、その後、広場に参集した参加者は地域の伝統的な料理をあじわいながらお昼ご飯をともにする。タコ料理、煮込み、ドーナツ、エンパナーダ、チーズにハチミツのデザートを食べ、歌ったり、踊ったりする。昼食が終わると、巡礼者たちは、それぞれの村に戻り始める。このお祭りがロマシェである。人々が合唱する美しいガリシア語の一節は、次のようである。曲の Franqueira は Xota ショタで演奏される。

Raiña dos montes, / Señora dos mares, / nosos emigrados/ devolve ós fogares.

(C.P.G. 7: *Cancioneiro popular galego*)

山の王妃、/ 海の聖母さまは、/ わが出稼ぎ人たちを / 故郷と呼び戻す。

Virxen da Franqueira,/ Virxe moi amada,/ aquí lle traemos/ a resucitada.

(Fraguas, 1995: 13)

フランケイラの聖母さま / とても親愛なる聖母さま / ここに蘇った人を / あなたさまのも

とに連れてまいります。

二回目のロマッシェは、聖母マリアの誕生した9月7日から三日間開催される。この三日間は春の祭礼より多くの人が集まる。ガリシア人はもとよりポルトガルからもやってくる。12時の荘厳ミサの後、フランケイラの聖母マリアの巡行が行われる。目隠しをした二頭の牡牛に聖母を乗せた山車を引かせて、先頭は四組の若者が音楽に合わせて棒を叩きながら踊り歩く (puxas と呼ばれる)。このほかに回教徒の王子とキリスト教信者の間の戦いの模様の寸劇も披露される。17世紀にビジャファニエ神父 P. Villafañe は、*Compendio Histórico*『聖所簡略史』のなかで奇蹟について、Cando non hai fe, non hai milagres. (信仰のないところには、奇蹟は起こらない。)と記している。それは、とりもなおさず13世紀にアルフォンソ十世により編纂されたガリシア・ポルトガル語の *Cantigas de Santa María*『聖母マリア頌歌集』に現れる奇蹟を示している。

私は数年前にジャーナリストのコンデ氏とモンダリス市のバルネアリオとソプロソを訪ねたことがある。モンダリスは、スペインで一番のミネラルウォーターを産出することで知られている静かな保養地である。また、ソプロソ城は12世紀に建造され、屋上からはポルトガルの地を眺めることができる。

詩人カバニージャスは1920年から29年にかけてモンダリス市の文化担当官として執務していた。1926年、彼はフランケイラの聖地巡礼を行い、その紀行集は1927年4月24日ガリシア研究セミナーで口頭発表され、その後 *Revista NÓS*, número 42. に掲載されている。1974年に文庫本として *Romaxes da Franqueira*『フランケイラの聖地巡』、Vigo, Edicións Castrelos として刊行されている。この文庫本には、紀行文のほかに、巡礼路を歩く詩、キリスト教徒とモロ人のロマンセ、モロ人とキリスト教徒の対話が収められている。

カバニージャスはフランケイラのバスクイージャスから、次の歌を復元している。祭りが終わり、来年も参拝することを暗示している。

Miña Virxen dos Milagros/ para o ano hei de

volver. (Filgueira, 1995: 18)

ミラグロスのわが聖母、来年また参ります。

ガリシア語の特異な音声特徴 (ヘアーダ: digho, conmigho) を示す伝承歌がフランケイラの聖母に現れているのであげておきたい。

Virgen da Franqueira/ iadiós non llo digho/ si posible fuera/ llevábaa conmigho.

(*Cántigas populares*, 73, 4.)

フランケイラの聖母 / あなた様にさようならは言えない / もしできるならば / 私と一緒にあなたを連れていけたらなあ。

ヘアーダとは、g [v] の音が氣息音化 [h] して発音する現象で、ガリシア西部地域の人々に顕著に表れる。表記上 -gh- で示している。さらに、iadiós のように語頭に i を添加する prostético が伝承歌には頻繁に表れていることもわかる。

II サント・アンドレ・デ・テエイシードのお守り Santo André de Teixido

(スペイン語は San Andrés de Teixido)

聖アンドレを祀る礼拝堂がある地名の Teixido は、ヨーロッパに繁茂するイチイの木で、-ido は場所を表す接尾辞である。この礼拝堂に詣でたのは1993年だった。まだスペインはペセタの時代であった。私が下宿していたサンティアゴのペンション・ベネラスの女主のエレナさんは、ガリシア人なら誰でも知っている格言があるという。

A San Andrés de Teixido,/ vai de morto/ quen non foi de vivo.

(R.G.B. 9274: *Refraneiro galego básico*)

「生きているうちに詣でなかったものは、死んでからサン・アンドレス・テエイシードに行く」と言うのは、どういうことか説明すると、生きているうちに、サント・アンドレの礼拝堂を詣でなければ、来世はトカゲかカエルに生まれ変わってしまうという伝承がある。

この伝承は、ガリシアの作家カステラオが『硝子の片目』(Castelao, *Un ollo de vidro*. 1920) のな

かで、ユーモアたっぷり記しているので、少しあげてみる。

<<Hoxe meu pai cun lagarto apreixado nas mans, faloume deste xeito:

—Teño de ir ó Santo Andrés de Teixido para cumprir unha oferta que fixen e non cumprín en vida. A miña alma ten de encarnar neste lagarto e moito tempo tardarei en voltar. Recomendóche que teñas conta da miña cova e que de vez en cando botes unha ollada ó meu esqueleto, pois teño un veciño coxo e pode roubarme unha perna.>>

今日、我が父は手にトカゲを掴んで、僕にこんなような話をした。

「私はテエイシードの聖アンドレス礼拝堂に詣でなければいかんなあ。俺の魂がこのトカゲに宿っているにちがいないから、帰ってくるにはかなり時がかかるだろう。参拝すると約束しておきながら、生きているうちには約束は果たせなかったなあ。だから、お前をお願いしたいことがあるんだ。俺の墓守をして、時々、俺の骸骨をちらっと見てくれないか。というのは、俺の隣の男は片足が不自由だから、俺の脚を盗みにくるかもしれないからさ。」

ということで、私も生きているうちに一度は詣でることにした。サンティアゴ・デ・コンポステーラ Santiago de Compostela からア・コルーニャ A Coruña まで電車で一時間、さらにア・コルーニャ市のバスターミナルからセデエイラ Cedeira 市まで 86km をバスで移動した。セデエイラからテエイシードまで 12km あるが、市バスなどの公共交通機関はないので、カペラダ峰の山道を歩くことにした。しかし、山道の 12km は大変だ。八月のガリシアの山道は、それほど苦にもならず二時間余りかけて歩いた。崖の上に広がる小さな平地に 20 軒ほどの住宅があり、100 人余りが暮らしている。ほどなく礼拝堂の尖塔が見える。建物はゴシック様式で、祭壇画は美術的評価の高いバロック様式だ。1970 年には聖アンドレの殉教を描いた壁画が発見されている。

夏休みとあって、ガリシアのあちこちからや

って来たサント・アンドレ詣での観光バスが停まっている。早速、参道から礼拝堂に向かって歩くと、すぐ目に留まるのがアニリンの赤、黄、緑、青色で彩色をほどこされたブローチのようなものが、平台の上に並べられている。サンアンドレシーニョス Sanandresños だという。一つ 300 ペセタスだったか。今は 4 ユーロになっている。パンの中身 miga ミガを捏ねてつくられた御守だという。現在三軒の家内工業で職人たちが作っている。かつては男、女、鳩の三種類のシンボルだけであったが、現在は八種類ある。御守は、さまざまな形にシンボライズされている。それをあげると、梯子・仕事と商売のお守り、舟・旅のお守り、手・学問のお守り、聖人・健康のお守り、冠・保護のお守り、魚（鯛）・食料のお守り、鳩・平和のお守り、花・恋愛のお守り。そして、この miga を使った占いがある。すなわち、唇を水で濡らして願い事をする間、ミガを聖水の噴水口の盆の上において濡らしてから取り出し、水の中に入れてもし浮けば願い事が叶う、沈めばもう一度ためしてみるのがいいらしい。私は、やはり旅の安全を記念して舟の形をしたサンアンドレシーニョスの一つ買い求めた。当然のごとく、お守りは浮いた。舟形のお守りは、聖アンドレが舟に乗って無事にテエイシードにたどり着いたことから作られたものだ。

聖アンドレの例祭は、毎年十一月の終わりにある。荘厳ミサで祝福された聖アンドレの枝、これをイグサで巻いた「求愛の香草」を奉納する。そして安産祈願の香草と呼ばれている。今日では、出産は通常病院で行われるが、かつては出産のあいだ「求愛の香草」をしっかりと持ち続けることが大事だった。古くから恋愛のハーブの歌が知られている。San Andrés de Teixido では、タンバリン使った Foliada de Soutelo の曲が知られている。

A herba de namorar/ a herba namoradeira,/ a herba de namorar/ lévoche na faltriqueira. (Fraguas, 1995: 4)

求愛のハーブ、恋に落ちるハーブ、求愛のハーブ、ポケットに入れてお前に持っていく。

テエイシードを後にして、セデエイラ市に戻

った。泊まるところを観光案内所で探すと、サグラド・コラソン広場にある Hostal Chelsea を紹介してくれた。早速向かうと、主のマノロが快く迎えてくれた。そして、夕食をもとめて出かけることにした。マノロにどこか美味しいレストランを訪ねると、レストラン Avenida を紹介してくれた。セデエイラは天然の漁港に恵まれてカンタブリア海の魚介類が豊富なところだ。とくに珍味とされるベルセーベス Percebes 烏帽子貝の産地である。新鮮なベルセーベスもいいが、セデエイラ名物の Rape con guisante グリーンピースを添えたアンコウの焼き魚を注文した。それから、この土地ならではのレケイショ Requeixo カッテージチーズが美味しい。レケイショで思っておくすのが、ガリシアのモンドニューード出身の友人でアルマンド・レケイショさんというひとだ。レケイショはガリシア語でチーズを意味するが、星誠編『葡和辞典』1954. 日伯文化協会によると、チーズは乾酪、バターは牛酪のようだ。明治時代、ブラジルに移民した日本人はバターやチーズを珍しそうに食べたことであろう。アルマンドさんの名字は、さしずめ日本語で言うところの「乾酪かんらく」さん、とでもいうのだろう。かつてガリシアを訪れた詩人ガルシア・ロルカはこのチーズを “duende” (不思議な魅力) と形容している。私は夕食に満喫してレストランを後にして、港の辺りを散歩して宿にもどった。勘定は 1,600 ペセタスだった。聖アンドレを訪ねた夏の日だった。

Ⅲ バルカの聖母巡礼

A Romaría da Virxe da Barca

ア・コルーニャ県のコルベド岬からマルピカ市までの大西洋に面した約 150km の海岸を Costa da Morte 死の海岸と呼んでいる。バルカの聖母は、この死の海岸の中ほどにある Muxía ムシアに祀られている。ここに詣でたのは、1996 年であったか。サンティアゴからカストロミル社のバスでムシアまで三時間かかる。

バルカの巡礼行の特色を表している歌に、次のような copra 四行の伝承歌ある。

Veño da Virxen da Barca,/ da Virxen da Barca
veño,/ veño de abala-la pedra/ de abala-la

pedra veño. (C.P.G. 427)

バルカの聖母からやって来たところだ、/ やって来たところだ バルカの聖母から、/ 岩を揺さぶってきたところだ、/ 揺さぶってきたところだ 岩を。

この聖地巡礼の楽譜 Canto de romería を見ると presto きわめて速い曲であることがわかる。

礼拝堂は 1719 年に建立され、改修工事を経て今日に至っている。このバルカの聖母巡礼のために多くの巡礼者たちが訪れている。伝説によると、聖ヤコブがフィステーラ辺りで苦しみを被りと失意の底にありながら教義を説いていた時、天使に導かれた石の船に乗った聖母が現れた。この出現の証拠として「揺れる岩」またはリューマチを治癒する「腰の岩」として知られている。バルカの巡礼行の宗教的な儀式は 12 世紀か 13 世紀に最初の礼拝堂ができてから続いている。現在では、バルカの巡礼祭は 9 月の第二日曜日に開催される。この巡礼は無形文化遺産である。

巡礼者たちは、揺れる岩の上に立ち、岩が揺れれば悩みが聖母に聞き入れてもらえた、いうことらしい。この祈願が成就しなければ、巡礼の目的は果たされなかったことになる。もう一つの祈願は、岩と岩の間の隙間を九回くぐれば、リューマチや腰痛が治癒するといわれている。だから巡礼者たちは九回潜り抜ける。ここで気になるのが、9 という数字である。ガリシアの民間信仰では、ランサーダの「九つの波」をうけるように、ケルト世界では 3 という数字が祈禱的な意味合いを持つ数であることから、聖なる数 3 を三回繰り返すと 9 になることにより、厄を浄化すると考えられている。私も岩の隙間をくぐり抜けたが、残念なことに九回は行わなかった。礼拝堂を後にして、宿を探しに街中に戻り一軒のバル兼ペンションに泊まった。そして夕飯をとりに階下の食堂に降りていくと、一人の女性が甲高い声で話しているのが聞こえた。明らかにヘアーダの発音だ。ヘアーダとは、有声軟口蓋閉鎖音 [ɣ] を無声咽頭摩擦音 [h] で発音する音声現象である。例えば、「着く」という動詞 chegar/tʃeɣar/ チェガール → /tʃehar/ チェハールのように発音する現象で、ガリシア西部地域

の音声現象の特徴と言える。ガリシア方言学上、ムシーアは西部地域に属するので、土地の人たちの発音は当然のごとくヘアーダである。

*

伝承歌は、聖母と守護聖人の名を織り込んでいるので、いくつかあげてみる。この歌のなかでガリシアの聖母・聖人の御名と巡礼を考えることができる。神聖な場所にあてがった何百ともしれない口承伝承歌が詩の中に生きていることが確認できる。論理的に考えると、多くの歌はキリスト、マリアまたは聖人を讃えて加護を求めたものだ。たいていガリシア語で愛着の意味を表す所有形容詞「我が・我らが」女性単数形 *miña*, 女性複数形 *nosa*, 男性複数形 *noso* を伴う。そこには神学的に暗示が見いだされ、聖像と礼拝堂に加護そして讃えるものとされる。

次の詩は、中世の吟遊詩人 *Meendiño* メエンディーニョがサン・シモン島からバルカへ巡礼に行きたいが、孤島からは行けない心情を歌っている。

Ai! Miña Virxen da Barca./ Ai! Miña Virxen valente,/ que estou no medio do mar,/ sin ter barqueiro que reme. (Filgueira, 1995: 17)

ああ！ わがバルカの聖母。／ああ！ わが勇壮な聖母、／私は海の中にいます、／漕ぐ船もありません。

ロマッシュエの特色を表明しているものに、先にあげた伝承歌に続く詩がある。

Veño da Virxe da Barca,/ veño de abá-la pedra,/ tamén vos teño de ver/ Santo Cristo de Fisterra. (C.P.G. 427)

バルカの聖母から来たところです、／岩を揺すってきたところです、／あなた様にもお会いしなければなりません／フィステーラのキリストさま。

ガリシアの閨秀詩人 *Rosalía de Castro* (1837-1885) は、1853 年にバルカの聖母巡礼祭に参加して、八音節 226 行のロマンセ形式で偶数行は類音韻 *e-a* の *Nosa Señora da Barca* の詩を創りあげている。冒頭と末尾の四行は次の伝承歌を採

っている。

Nosa Señora da Barca/ ten o tellado de pedra;/ ben o pudera ter de ouro,/ miña Virxen, si quixera. (C.P.G. 388)

聖バルカのマリアさまは／石の屋根の下にいらっしゃる、／マリアさまがもしおのぞみなら／金の屋根をさしあげましょう。(pudera=podia, Virxen=Virxe)

Bendita Virxe da barca/ bendita por sempre sea / Miña virxe milagrosa/ na que tantos se recrean.

神聖なバルカの聖母さま／あなたは永久に祝福されています／わが奇蹟の聖母さま／人はそこで長いこと楽しむ。

ムシーアを後にして、カマリーニャスに向かった。この町は、昔から女性がレース編みで伝統工芸品を産出している港町で、カバニージャスが採集した伝承歌には、故郷への郷愁の歌がある。この伝承歌はガリシアのトラッドグループ *Luar na Lubre* がケルト風にアレンジして *Ao pasar por Camariñas...* の出だしで見事に再現している。

Camariñas, Camariñas, / xa me vou camariñando, / por unha de Camariñas/ ando no mundo penando. (C.P.G. 688)

カマリーニャス、カマリーニャス／もう私はカマリーニャ人になってしまう／カマリーニャスの一人として／私は世の中で苦しんでいる。

IV ア・ランサーダの聖母マリア

A Ermida de Santa María de A Lanzada

ポンテベドラ県サン・シェンショ市にあるア・ランサーダの聖母マリア隠修道には二度ほど訪れたことがある。ポンテベドラ市から 26km ほど車で走るとア・ランサーダ海岸に到着する。かつてフェニキアまたはローマ帝国時代には灯台があったところだ。中世には、サンティアゴ・デ・コンボステラ聖堂の大司教セルミーレスとウラッカ王妃との間で闘争があった舞台でもある。要塞を築いたが、1122 年にアラビア人

の襲撃により要塞は破壊された。その後 14 世紀に再建されたが、要塞としての機能は失われた。ガリシアの沿岸部には、かつて三つの塔があった。一つはカトイラのオエステ塔、もう一つはカンバードスのサン・サトゥルニーニョ塔、そしてア・ランサーダの塔である。これらの要塞は、バイキング、ノルマンディー、さらにアラビア人から領土を守るためであった。地名のランサーダは、lanzar o meigallo（魔法を浴びせる）から由来している。

ア・ランサーダの礼拝堂は 1300 年頃の創建である。16 世紀になり城壁と礼拝堂が残り、現在のような隠修堂が存在している。礼拝堂のアブス（後陣）は半円形でロマネスク様式の典型的なものだ。中に入ると明らかにゴシック様式だ。異教徒たぶんケルト人の儀式からキリスト教化された巡礼（ロマリニア）の儀礼が祝われる。それは「九つ波のなかで水浴する」ことである。

昇天祭（Ascensión 復活祭 40 日後）の日に、日の出前に男、女、子供たちが家内安全と健康そして厄払い（Meigas fóra）のために水浴する。さらに、聖ヨハネ（6 月 23 日）の前日、深夜の 12 時に礼拝堂の周りを時計と逆回りに Avemaría 聖母マリアに捧げる祈り、Padrenuestro 主の祈り、を唱えながら、“Nosa Señora da Lanzada/ polo fillo que pariches/ fai que me quede preñada.”（ランサーダの聖母、あなたは男の子を産んだから、私を妊娠させてください）という呪文を言いながら九回廻り、続いて、砂浜で跪いて、または腹ばいになって波を九回受ける。当然のごとく呪文を言いながら。海から上がり、衣類を乾かして、夕食後に聖母に献花して儀式は終了する。これは leito da virxe（聖母の寢床）と呼ばれている。また、船乗りたちは、海の安全を祈願して礼拝堂内に船の模型を奉納している。典礼において、ミサが一般的な儀式であるが、祓い清める水浴はロマッシュ巡礼における奇妙な特色を現わしている。

私が訪ねた八月の初旬は、風が強く飛ばされそうだった。窓越しに黒髪の聖母が赤ちゃんを抱いている姿を拝顔することができたのは幸いであつた。九つの波を受ける日は、もう一度ある。八月の最終土曜日の深夜 12 時である。これは、どういうことかと言うと、不妊に悩む女性

が子供を授かる儀式のようである。事実、マドリッド在住で、結婚して 17 年になる妻がこの儀式に参加して、その後、男の子を身ごもったという 1845 年の記事がある。

カバニージャスは『ガリシアの伝承歌』（Cabanillas, *Cancioneiro popular galego*. 1983）のなかに採録して、396 番に次の歌をあげている。

Miña Virxe da Lanzada/ bota castañas abaixo/
 anque non teño mantelo/ collereinas no refaixo.
 ランサーダのわが聖母は / 栗を下に投げる、/
 私はエブロンがないけど / 私はそれをペチコートに拾っておこう。

フィルゲイラは韻律上、首句反復と韻を踏んだ語に二つの組み合わせと変化は、中世の抒情詩の様相のなごりであると、記している。（Filgueira, 1995: 18）

Miña Virxen da Lanzada/ miña Virxen
 lanzadeira...

ランサーダわが聖母 / わが果敢なる聖母...

曲は Alborada da Lanzada ランサーダの夜明けの歌のなかで、Unha noite en San Cristo 聖キリストの夜、が知られている。

おわりに

伝承歌のなかには聖母と守護聖人の名を織り込んだ歌が数多くある。ガリシアの聖母、聖人の御名を巡礼歌のなかでとりあげて、神聖な場所を讃えた何百ともしれない口承伝承歌が人々の心の中に生きている。論理的に考えると、多くの歌はキリスト、聖母マリアまたは多くの聖人を讃えて加護を求めている。ガリシア語で愛着の意味を表す所有形容詞「私たちの」を意味する noso, nosa を伴う。そこには神学的な暗示が見いだされる、と考える。

伝承歌は、取りも直さず 950 年頃に始まったサンティアゴ巡礼に歌われ、12 世紀に編纂された *Codex Calixtinus* 『カリクスティヌス写本』から採られたもので、聖地巡礼の歌に影響を与えたと考える。その形式は反復形で、神への祈りと称賛と呪文のなかで、巡礼者たちにより繰り返

返され異彩を放たれた。

DUM PATER FAMILIAS (*Codex Calixtinus*, 9. Ed. facsímil)

神の間で

Herru Sanctiagu, Got Sanctiagu/ eultreia esuseia
Deus aia nos.

おお 御主 聖ヤコブ 聖ヤコブ / ウルトレイヤ
スセイヤ 神よ 我等に御加護を
(ウルトレイヤ、スセイヤは巡礼者が交わす挨拶の言葉)

宗教的な根拠となる祭礼は、13 世紀に編纂された『聖母マリア頌歌集』CSM 351 番に見出す

ことができる。(Alfonso X: *Cantigas de Santa María*. III. Edición de Walter Mettmann. Madrid, Castalia. 1989.)

Ena ssa festa d'Agosto, mui gran gente ven aly,/ por oyr toda-las oras, e é costumd'assy/ que tragen y pan e viño en carretas, e ben y/ o dan, por seu amor dela a queno quer receber.

八月のお祭りの日に多くの人がそこにやってくる、/ 祈りをすべて聴くために、それが習慣です / 人々はパンとワインを手押し車に積んで運んでくる / 聖母マリアの慈愛により、それを欲しい人に与える。

Bibliografía

Cabanillas, Ramón: *Cancioneiro popular galego*. Vigo, Galaxia, 1983.

Ferro Ruibal, Xesús: *Refraneiro galego básico*. Vigo, Galaxia, 1987.

Filgueira Valverde, Xosé: “O canto na prerregrinación e as romaxes”, en *Romarías e peregrinacións, Actas do Simposio de Antropoloxía*. Santiago de Compostela, Consello da Cultura Galega, 1995. pp. 17–26.

Fraguas, Antonio: *Romarías e Santuarios*. Vigo, Galaxia, 1988.

Fraguas, Antonio: “Peregrinaxe a Santiago e as romarías de Galicia. Lendas e tradicións.” en *Romarías e peregrinacións, Actas do Simposio de Antropoloxía*. Santiago de Compostela, Consello da Cultura Galega, 1995. pp. 7–16.

Schubarth, Dorothé e Santamarina, Antón: *Cántigas populares*. Vigo, Galaxia, 1995.

浅香武和編訳『フランケイラの聖地巡礼』銀河書籍、2021. 原題は Ramón Cabanillas, *Romaxes da Franqueira*. Vigo, Edicións Castrelos, 1974.

(浅香武和・本学非常勤講師)